氏名（本籍）	細川周平（神奈川県）
学位の種類	学術博士
学位記番号	博音第9号
学位授与年月日	平成元年3月25日
学位論文等題目	音楽における複製技術の諸問題（レコードを中心に）
論文等審査委員	

（主　査）	東京芸術大学	音楽学部	教　授	芸術学修士	船山　隆
（副　査）	〃	〃	〃	法学士	服部幸三
（〃）	〃	〃	〃	芸術学士	角倉一朗
（〃）	〃	〃	助教授	学術博士	柘植元一
（〃）	〃	〃	〃	教養学士	上参郷祐康

（論文の内容の要旨）

今世紀の音楽生活が複製技術によって特徴づけられていることは誰しも疑わない。しかし従来の研究はそれを二次的なもの。正規の音楽経験の外にあるものとして扱ってきた。独創的な事柄と反復的な事柄がそうした考えにとっては両立しえないからである。この論文は逆に複製技術、とりわけレコードが反復的なもの、「機能的なもの」が演奏上の創造性、また聴取の想像力を根本から刷新し、過去の世紀にはありえなかった別の音楽経験を可能にしたことを美学的に論じる。

序では、基本的な姿勢を明らかにするために30年代のチェコの前衛運動を支える思想として生まれた構造美学（ムカジョフスキー）、「原子時代」と呼ばれた50年代の人間の危機的な状況を技術の「本質」にたちかえることで逆に救いを見出そうとしたハイデガーの存在論、70年代の大衆消費文化の成熟を微小な差異の創造的な反復として肯定したエーコのシリーズ物の美学を紹介する。音楽美が19世紀の自律美学がモデルとしたコンサート・ホールに限定されず、社会的な機能との調和のなかで、また（複製）技術の本質をえぐりだす力として正当化される。

第1章「レコードの考古学」はレコードの歴史を音響的なデータの自律化、したがって人為的な操作可能性の増大の歴史として追う。エジソン以前にも自動演奏機械はいくらもあったが、それは音の出る以前の段階に機械が介入するものだったが、エジソンのフォノグラフはその名の通り（フォノ＝音、グラフ＝書、文字）音を書く装置であった。事実彼はそれを事務の口述筆記の道具として売り出そうとした。また彼が聴覚障害者で触覚や視覚に頼って開発を進めたことは象徴的である。つまりフォノグラフは鳴り響く音から独立したデータとして音を書き込む機械であり、その書かれたものには時間的なパラメータが刻みこまれているからである。エジソンの製品は彼の意志に反して事務用ではなく音楽用として普及した。彼の次に現れたベルリナーは当初より音楽用、娯楽用として考案し、マスター盤から何百枚もコピーがとれるような装置として売り出した。音楽の真の複製時代はここに始まる。次の革新は1924年の電気録音でマイクロフォンのレベルを隣室で操作できるようになり、レコード制作に別の操作性が加わった。戦後現れた磁気テープは編集の技術、また多重録音の技術を不可欠なものとし、ロックというテクノロジーに依存したジャンルを生むことになった。

第2章「聴取と複製技術」は30年代のベンヤミンとアドルノの論争に遡り、複製技術がアウラの解放という世界史的な出来事に関わるのか、それとも芸術のフェティシュ化という退化につながるのか、ということを議論する。前者のいう「散漫だが批判的な態度」がレコードにとっても妥当で、後者のいう「構造的な聴取」即ち音楽の構造を全て聴き取る専門家の耳は可能な聞き方の一つとして相対化される。また受動性を偽りの意識と結びつけるアドルノの思想を退け、能動／受動は別の文化的な操作として同等に扱われる。レコードは起原をもたない永遠の反復として経験され、我々は反復されるたびに差異が生じる回帰する時間の中を生きるようになる。ニーチェの永遠回帰は資本主義的な商品秩序と無関係ではない。

第3章「美的経験としてのレコード聴取」はレコード

が本質的なポピュラー音楽を視点に収めた美学へ向けていくつかの概念を定義する。まず「サウンド」。これは音色やリズムを中心にした瞬間的な感覚性で、あらゆる瞬間が完全で全体的であると考える。ポピュラー音楽の聴き手がまず問題にすることであり、断片的な聴取もまた一つの聴きかたとみなされる。これと付随して「効果」もアドルノのように偽りのものと見なるのではなく、むしろ直接的な感覚的なるものの出現として肯定される。感覚は背後になにもはらまず、ただそこに現れ知覚されたものだけが「真実」なのである。この意味で修辞的な力と考えることもできる。ポピュラー音楽はこうして虚偽の音楽なのではなく効果としてのみ真実を認める。複製技術は無差別に音響に侵入し、過去の遺産も含め「ポピュラー化」する。テクノロジーは美的な本質をゆさぶる修辞的な力として、あらたな経験の中心に据えられるようになる。